

一人ひとりのよさを 認める学校が、 誰もが幸福な社会を創る

学習院大学文学部教授、中央教育審議会委員
秋田喜代美



あきた・きよみ 学習院大学文学部教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。東京大学教育学部助手、立教大学文学部助教授、東京大学大学院教育学研究科教授を経て、現職。第12期中央教育審議会委員も務める。専門は教育心理学、授業研究。主著に、『学びの心理学』（左右社）、『学校教育と学習の心理学』（共著、岩波書店）、『新保育の心もち』（ひかりのくに）などがある。

私たちが目指す社会とは

誰もが幸せな社会を
創りたいと、皆が語った

中央教育審議会が取りまとめた「次期教育振興基本計画」について（答申）（以下、基本計画）では、これからの教育の総合的な基本方針として、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイング（*）の向上」の2つのコンセプトを掲げています（P.15図1）。グローバル化や気候変動などの地球環境問題、少子化・人口減少、都市と地方の格差

などの社会課題、そして国際情勢の不安定化の中で、この社会を持続的に発展させながら、一人ひとりの幸福を実現することが私たちには求められています。

今回対話した3人の皆さんは、持続可能で誰もが幸福に生きることができ、社会を自分の手で創りたいと異口同音に語り、それぞれが主体的に活動していました。

立崎さんは、コロナ禍の中でフェイ スシールドの製造という社会貢献活動に取り組み、高校卒業後は、海外大学進学に先立ちギャップイヤーを設けて企業で働く姿から、多様なキャリアパスがあることを私たちに示してくれました。

伊関さんは、学校と地域がつながり、多様な人が支え合いながら生きていくコミュニティづくり、防災というアプローチから挑戦しました。

そして、清水さんは、起立性調節障害によって高校を中退せざるを得なかった状況の中で、自分自身を見つめ直し、新たな目標を見つけた経験を基に、失敗や挫折があってもやり直すことができる社会、次の成長を期待し合える社

会の大切さを語ってくれました。

3人の生き方から
目指す社会の姿が見える

基本計画では、誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進を掲げています。

立崎さん、伊関さん、清水さんの3人は、それぞれの生き方を通じて、急激に変化し続ける社会においても一人ひとりがよりよく生きることができるといふことを、私たちに教えてくれました。そして、自らの生き方だけでなく、「これからの社会はこうなってほしい」、「今の社会にはこんな矛盾がある」、「こうすれば、みんながもっと幸せになれる」といった提言もしてくれました。

3人の皆さんとの対話を通して私は、若者たち、子どもたちが意見表明をできるよう、社会全体として彼らの声に耳を傾けることの大切さを感じましたし、その意味でも、教育が社会に対して果たす役割はますます大きくなってきていると思いました。

* 身体的・精神的・社会的によい状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。

図1 次期教育振興基本計画のポイント

次期教育振興基本計画のコンセプト

- 2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成
- 日本社会に根差したウェルビーイングの向上

今後の教育政策に関する基本的な方針

グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成

- 主体的に社会の形成に参画、持続的社会的発展に寄与
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、大学教育の質保証 など

誰1人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進

- 子どもが抱える困難が多様化・複雑化する中で、個別最適・協働的学びの一体的充実やインクルーシブ教育システムの推進による多様な教育ニーズへの対応 など

地域や家庭とともに学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進

- コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進、家庭教育支援の充実による学校・家庭・地域の連携強化 など

人生100年時代に複線化する生涯にわたって学び続ける学習者

教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の推進

- GIGA スクール構想、情報活用能力の育成
- 基盤的ツールの開発・活用、教育データの分析・利活用の推進 など

計画の実効性確保のための基盤整備・対話

- 学校における働き方改革のさらなる推進
- NPO・企業等多様な担い手との連携・協働 など

*中央教育審議会「次期教育振興基本計画について(答申)【概要】」を基に、編集部が抜粋して作成。

これからの高校の役割とは

一人ひとりの生徒のよさを認める学校に

これからの高校教育には、社会を生き抜くために必要な最低限の資質・能力を育みながら、生徒の多様性を尊重し、一人ひとりのよさを伸ばしていく

ことが求められます。そのためには、興味・関心を軸にした深い学びが求められます。高校では、文理に分かれて学ぶことも多いですが、幅広い教養を学べるのが高校のよさでもあり、学びを深めることにもつながります。大学入試がそうした学びの延長に位置づけられていくことも必要でしょう。

授業の形態、教える内容、教材や教具は時代とともに変化します。しかし、生徒が教師に支えられ、教師との信頼関係を土台に学び続けるという点は、日本の教育の不易であり、日本社会に根差したウェルビーイングにもつながっていく価値だと思います。

つながりという点では、学びと社会とのつながりに気づく機会も重要です。教師や生徒が、地域住民とともに社会の課題について考えたり、具体的な問題を解決したりする探究の面白さを味わうことで、生徒は自身が社会の創り手であると自覚するからです。

社会の創り手を育て、未来を創る教師という仕事

ただ、立崎さんも指摘していました

が、先生方が忙し過ぎる現状は改善しなければなりません。残業時間等の勤務実態調査を進めながら、学級定数などについて議論していくことが必要ですが、それと同時に学校という場に、教育や福祉、医療、さらには組織づくりや働き方に詳しい多様な専門家、サポーターが参画し、先生方とチームを組むことで、先生方がご自分の仕事に専念できるような学校を創ることが求められていると思います。

生徒のウェルビーイングの実現と先生方のウェルビーイングの実現は、一体化して取り組むべきものであるという前提で、これからの教育のあり方を考えることが重要です。

私は3人の皆さんと対話をして、改めて高校生は、社会を変える大きな力を持っていると思いました。先生方も日々生徒と接する中で、私と同じことを感じられているのではないのでしょうか。まさに現場の先生方が、次の社会の創り手を育てているのです。どうか教師という仕事に、これまで以上に誇りを持ち、これからも生徒を支え続けていってください。